

『祭りは江差の原風景』

今夏、暑く寝苦しい夜に眠りに入りきれず、いろいろな思い出が頭を巡っていました。

昔話になりますが、教員となって数年たった頃のことです。校務で隣の小学校へ行った折、「ちょっと話を聞いてくれ！」と教頭先生に呼び止められました。その内容は・・・

校内のガラスが割れたので、教頭先生は赴任したばかりの若い先生にガラスを切ってきてくれと頼みました。（当時の学校の窓は板ガラスがはまっていて、結構簡単に割れました。割れたら寸法を測り、ガラス切りで切ったガラスを“しぶいち”で打ち止めていました。）若い先生が切ってきたガラスをはめようとする、全く寸法があっていない。教頭先生がどうやって測ったのかを聞くと、若い先生は『目見当です』と答えたそうです。『あきれ過ぎて怒鳴る気にもなれなかった』との嘆きに、笑い返ししながら『自分も似たようなことをしてないか？』と頭の中で振り返っていました。

私が仕事の要領を考えるようになったのは、初任地の校務補さんに多々教えてもらったからです。当時の私は、【作業現場に釘と金槌を持っていく。打った釘が曲がったのでボールを取り行く。不足材料があったので取りに行く。】といった具合でした。「作業に必要な物を考えて、全部持って行かないと仕事になんねえべさ。」と笑いながら一言。また、体育祭でグラウンドに一直線に並べられた三角コーンを回収する際、手前から担ぎ始め、最後のコーンを回収して戻ってくると、「まっすぐ一番向こうまで行って回収しながら帰ってくれば、ずっと重たい思いをしないで効率いいべさ」と笑いながら一言。なるほどその通りです。ちょっと考えれば効率・要領の良い仕事の仕方はあるのです。もちろん、経験の有無は大きいですが、考え工夫する意識を持つことは、私にとって大きな利点となりました。

さて、寝苦しかったのは私だけでなく、今夏の暑さには誰もが辟易されたのではないかと思います。小中学生の頃の夏休みは朝から晩まで海にいたものです。『夏は暑いのが当たり前、暑い方が夏らしさを感じられて良い』と、昨年までは思っていました。しかし、今年の夏の尋常ではない暑さにその思いは吹き飛びました。日本全国で熱中症に関わるニュースが毎日のように流れ、痛ましい事故もたくさんありました。江差町では、気温30度超えとなる真夏日が8月に16日あり、お盆過ぎの22日からは10日連続となりました。

過去にない猛暑の夏、4年振りに開催された姥神大神宮渡御祭は、9日は32.1度、10日は33.2度、11日は33.6度と、3日間とも30度を超える暑さでした。照井町長の判断で、冷房設備のある役場保健センター（10日）、文化会館（11日）が避難所として設定され、多くの方が身体を休められました。熱中症が心配される状況もあって、経口補水液の手配に奔走する役場職員の姿もありました。各山車とも参加者、特に子供たちの

健康に配慮しながら苦心の運営をされたことと思います。頭取さんをはじめとする関係者の皆さまに敬意を表するばかりです。沿道の見物の方々からは、黒羽織を着こんだ暑そうな姿に熱中症を心配する声も聞こえていました。

4年振りのお祭りは、多くの人に喜びや希望を与え、特に子供たちにとっては何にも代えがたい経験になったことと思います。お祭りが3年間途絶え、小学生・中学生・高校生と、それぞれにある役割が継承できなかったことでの苦労もあったと思います。8月はじめの夜、それぞれの町内会に響く太鼓や笛の練習の音を聞くために散歩に出かけました。子供たちの笑顔はもちろん心を和ませてくれますし、お世話し指導する大人の顔にも充実感が表れていました。久々の祭囃子の練習の音は、町民の皆さまの心にたくさんの栄養を与えてくれたものと思います。

冒頭に続き昔話となりますが、祭りの最終日に同級生が「ああ、祭り終わってまう〜！」「来年の祭りまであと365日だ〜！」と泣きながら叫んでいたのを思い出します。お盆にはもう江差から離れてしまうが、祭りに焦点を合わせて帰るという仲間がたくさんいました。子供たちにとって江差の祭りは原風景のひとつです。江差を離れても思い浮かべる大切な情景です。それを育てていくのは町内会の大人であり、次の代へと脈々と引き継がれていくものです。江差の祭りへのリピーターもたくさんいます。短い間でも江差に住んだ記憶を鮮明に残す方もいます。それは江差の町の人々の心に対し、何か感じられるものがあるからかもしれません。

『少しでも江差に関わった人は、みな江差人！』

そんな思いで人を迎える心が江差にはあるのだと思います。町民互いに思いあう気持ちとともに、大切に受け継いでいきたいものです。